

「源氏千種香」の依拠本を探る

―聞きの名目と源氏寄合に注目して―

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 武居 雅子

要 旨

「源氏千種香」は、元文年間（一七三六―一七四〇年）に成立したと考えられる香の伝書『香道蘭之園』の八・九巻に掲載されている組香で、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材としている。この「源氏千種香」は、他の香の伝書や組香集には見られない珍しい組香である。香道実技の場において、「源氏千種香」は『源氏物語』に基づいて考案された文学性豊かな組香と考えられてきたが、内容を精査してみると、原典の『源氏物語』と明らかに異なる事象が存在していて、必ずしも忠実な物語の再現はされていない。一方連歌の隆盛にともない、『源氏物語』の言葉（源氏寄合）を用いた句が数多く詠まれ、その教則本として『源氏物語』の梗概書が機能したことから、「源氏千種香」も原典『源氏物語』を直接

の典拠としたのではなく、いずれかの梗概書を経て考案されたものではないかと推測した。そこで、まず巻順の異同を手がかりに各種の梗概書を調査したところ、中世から近世にかけて最も流布したといわれる『源氏小鏡』（以下『小鏡』とも略称）のそれとほぼ同じであることに気づき、拙稿「『源氏千種香』の依拠本を探る」（『総研大 文化科学研究』第9号、平成二十五年三月）において、「源氏千種香」の巻順、「簪木香」証歌、「玉鬘香」衣配り、「梅枝香」薫物合せ、「若菜香下」女薬のそれぞれの記述と、『源氏小鏡』第一系統（古本系）第一類京都大学本（伝持明院基春筆。以下古本系京都大学本と略称）の記述に共通点があることを指摘し、「源氏千種香」の考案に際し、この『小鏡』が介在した可能性について言及した。

本稿では、「源氏千種香」に登場する聞きの名目に『源氏小鏡』の寄合と同一のものがあることに注目し、さらには、『源氏小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目を精査検証しつつ、中でも古本系京都大学本系統が、「源氏千種香」の依拠本である可能性を探りたいと考える。「源氏千種香」の聞きの名目の多くが、『源氏小鏡』の源氏寄合から撰取されたとして、それは受動的な『小鏡』享受であり、さらに『小鏡』地の文から取り入れた言葉を使って新たな聞きの名目を生み出したのなら、それは香という知的遊戯世界での能動的『小鏡』享受と言えるのではないだろうか。

キーワード：源氏千種香 源氏小鏡 聞きの名目 源氏寄合 組香 地の文

はじめに

第一章 組香における聞きの名目の機能

一 「宇治山香」と「花散里香」を例に

二 「須磨香」の聞きの名目と『源氏小鏡』の源氏寄合

第二章 『源氏小鏡』地の文から生まれたと考えられる聞きの名目

一 「須磨香」の「柴の煙」

二 「明石香」の「只ならぬ身」

三 「朝顔香」の「いつき」と「神のいかき」

四 「篝火香」の「夏の遅月」

五 「巻柱香」の「大姫君」

六 「浮船香」の「あらはれ文」「九条わたり」「こたま」「小野の尼

まとめ——「源氏千種香」聞きの名目と『源氏小鏡』諸本の関係の

整理——

はじめに

「源氏千種香」は、元文年間に成立したと考えられる香の伝書『香道蘭之園』⁽¹⁾の八・九巻に掲載されている組香(数種の香を組合わせて一定の主題を表現する香のゲームの様式で、文学的主题を持つものが多い)で、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材としている。この「源氏千種香」は、他の香の伝書や組香集には見られない珍しい組香である。香道実技の場において、「源氏千種香」は『源氏物語』に基づいて考案された文学性豊かな組香と考えられてきたが、内容を精査してみると、原典の『源氏物語』と明らかに異なる事象が存在している。物語には見られない和歌が組香の証歌(組香主題の典拠となる和歌のこと)とされていたり、物語にはない言葉が聞きの名

目に使われていたりする。聞きの名目とは、組香の主題や出典文学に拠ることばがあらかじめ指定され、香を聞いたら、そのことばで答えることである。また巻の順序が違っていたり、登場人物の欠落など、必ずしも忠実な物語の再現はされていないのである。

ではなぜこのような現象が起きたのか。組香における物語内容の改編には、何らかの根拠となるものが存在したのではないかと考えた。香道の歴史を顧みると、その創成に、宗祇、牡丹花肖柏、三条西実隆、村田珠光など、連歌師や連歌に嗜みの深い人物が多く関わったことに気づく。連歌の隆盛にともない、『源氏物語』の言葉(源氏寄合)を用いた句が数多く詠まれ、そのテキストとして『源氏物語』の梗概書が機能したことから、「源氏千種香」も原典『源氏物語』を直接の典拠としたのではなく、いずれかの梗概書を経て考案されたものではないかと推測した。巻順の異同は、中世から近世にかけて最も流布したといわれる『源氏小鏡』(以下『小鏡』とも略称)のそれとほぼ同じである。即ち、「源氏千種香」の巻順、「篝火香」証歌、「玉鬘香」衣配り、「梅枝香」薫物合せ、「若菜香下」女楽の記述と、『源氏小鏡』第一系統(古本系)第一類京都大学本(伝持明院基春筆。以下古本系京都大学本と略称)の記述に共通点が見られ、「源氏千種香」の考案に際し、この『小鏡』が介在した可能性が指摘できる(『総研大文化科学研究』第9号、二〇一三年三月)。なお、京都大学本については、伊井春樹氏・岩坪健氏などの先行研究がある⁽²⁾。

本稿では、「源氏千種香」に登場する聞きの名目に『源氏小鏡』の寄合と同一のものがあることに注目し、『小鏡』諸本の寄合と比較し精査検証しつつ、中でも古本系京都大学本系統が、「源氏千種香」の依拠本である可能性を探りたい。

まず第一章では、組香における聞きの名目の機能を、实例を挙げて述べ、その後「源氏千種香」の「須磨香」を中心に、聞きの名目と『小鏡』

諸本の寄合との関連を提示し、第二章では『源氏小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目を複数紹介して、「源氏千種香」における『源氏小鏡』享受の様相の一端を明らかにしたい。

なお、本稿では宮内庁書陵部所蔵御所本『香道蘭之園』（一六三—八八五）を底本とし⁽³⁾、『源氏小鏡』については岩坪健氏による『源氏小鏡』諸本集成⁽⁴⁾（『研究叢書』325『源氏小鏡』諸本集成）和泉書院、二〇〇五年）と、岡見正雄氏による『古典文庫 良基連歌論集』三所収本「光源氏一部連歌寄合之事」（一九五五年）を用いた⁽⁴⁾。また、『源氏物語』本文の引用は『新編日本古典文学全集 源氏物語①⑥』に拠る。また、『香道蘭之園』の概要・成立経緯、「源氏千種香」の概要についての詳細は先掲の拙稿を参照されたい。

第一章 組香における聞きの名目の機能

一 「宇治山香」と「花散里香」を例に

組香では、その題材となる文学に因んだ言葉が香木につけられ（香名または香銘）、香を聞き当てる回答する時の言葉も、あらかじめ指定されることがある。これが聞きの名目である。盤物ではたいいてい香名も一・二・三といった番号で表現され、答える時もその番号で答え、聞きの名目は使われないことが多い。盤物とは盤立物ともいい、盤上で立物と呼ばれる人形や花、鳥などの様々な形象を、香を聞き当てることに移動させて楽しむもので、視覚的な遊戯性を高めるものとして生まれた組香である。東福門院和子の後水尾天皇への入内を契機に江戸中期にかけて流行したとも言われる（神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年、四〇九頁）。盤物では立物そのもの（意匠）が、主題となる文学作品の場面を視覚的に再現し、香の聞きにしたがい立物に物語に因んだ所作をさせるなどして、物語場面の臨場感を演出するため、聞きの名目が必要とされないとも考えられる。「源氏千種香」では、香の聞きにしたがい、

基石（空蟬香）や絵（絵合香）を取り合う、花（胡蝶香）や鳥（御幸香）を人形に持たせる、御簾を巻き上げる（橋姫香）、短冊を交わす（漂漉香、関屋香盤物）の例がある。

まずは『香道蘭之園』二巻収載の「宇治山香」を例に、聞きの名目が組香においていかに機能するかを見てみよう。「宇治山香」は喜撰法師の歌「我が庵は都のたつみしかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」を題材にした組香であり、初心者にも解り易いので香席でよく行われる組香である。（ルビは筆者による）

- 一 我庵は
- 二 都のたつみ
- 三 しかそすむ
- 四 世をうち山と
- 五 人はいふなり

おのく一包つ、外に試有。

右五包打合、その内一炷き、跡は捨香なり。

一の香ならば我庵、二はみやこのたつみと、香の出やうにしたかひ小記録に書出ス也。

試の小包の上に歌を書。

本香の小包は中に歌を書。おくの折込の所に書也

小記録 都のたつみ 名

（『香道蘭之園』「宇治山香」）

右によれば「宇治山香」では、五種の香木を用い、喜撰法師の和歌の五つの句を香銘としてつける。本香の前にこの五種を連中、即ち香の聞き手に、試み（あらかじめ香を聞き、それを記憶すること）として香りを聞かせ、本香では、この五包を打ちませた後、その内の一包だけを撰んで炷き出す。残りの四包は「捨香」といって、炷き出さず香りを聞かない。連中は、五種の内、どの香が炷かれたのかを考えて、その香銘を小記録（回答用紙）に記して答えるのである。

「宇治山香」は、喜撰法師の和歌が香銘と聞きの名目の両方に使われた例であり、五包の内一包だけを炷き出すのは、喜撰法師の歌がこの一首だけ遺されているという通俗的理解に拠るものと考えられる⁽⁵⁾。また「宇治山香」は、初期の組香「古十組」と呼ばれる、最も古い段階に成立したと考えられる十の組香の内の一つでもある。「古十組」の他の組香は頓知的な要素が強く、文学性は希薄である⁽⁶⁾。また証歌やそれに因んだ香銘などはなく、一・二・三といった番号で答えるものが多い。組香が単に香りを聞き当て、嗅覚を競う即物的なものに終らなかったのは、ひとえに文学との邂逅があったからであり、「宇治山香」は「古十組」の内一つでありながら、喜撰法師の和歌を前提としたことで、文学的興味を深める聞香への過渡的様相を含んだ組香と考えられる。

では「源氏千種香」の組香では、聞きの名目がどのように機能しているのか。「宇治山香」と同じように、和歌の五句を聞きの名目に使う「花散里香」で見よう。

無試別香 五包、一・二・三・四・五と五品。

試あり同香 五包、これをウとす。

右試なしと試ありと一包つ、二包結合、五結にして二炷き、也。

試なしはき、捨の香也。記録にもかゝす。

一番ニウ何 立はな 二番ニウ何 香をなつかしみ

三番ニウ何 ほと、きす 四番ニウ何 はなちる里

五番ニウ何 尋てそとふ

跡ニ出ルウ 皆中川也。 (『香道蘭之園』「源氏千種香」)

試み無しの五種の香五包と試み有りの同香ウ⁽⁷⁾・五包から一包ずつを取り、二包を一結にして、これを五結つくる。そしてこの五結それぞれを炷き出す時に、二包を打ちませる。連中は二炷聞きを五回行うこと

になる。そしてそれぞれの二炷の香の出る順番によって、五回の内一番目に、ウ・試み無しの順で香が出たら「立はな」と答え、二番目にウ・試み無しの順で香が出たら「香をなつかしみ」というように答えていく。もしも、試み無しの香・ウの順で香が出たならば、いつでも「中川」と答えるというルールである。

ここでの聞きの名目は源氏の麗景殿の女御に呼びかけた和歌、

橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

(『新編日本古典文学全集 源氏物語②』一五六頁)

に拠り、「中川」は、源氏が麗景殿の女御を訪れる途中で、中川あたりの昔なじみの女に消息を入れる場面での女の返歌に由来する。

ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨の空

(一五五頁)

この組香での試み無しの香は一本戦前に香りを聞いていないから、はつきりしないということ―「あなおほつかな」であり、試み有りのウの前に試み無しの香が出た時は、すべて「中川」と答えるのである。聞きの名目「中川」から物語での中川の女の返歌が連想されなければならない。したがって、聞きの名目が組香での肝要な言葉であり、背後にある文学的興趣を担う象徴的言葉として機能し、連中一座の共通認識の基盤となるのである。

二、「須磨香」の聞きの名目と『源氏小鏡』の源氏寄合

「源氏千種香」は『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「夢浮橋」を除いた五十二帖を題材とした組香であるが、関屋巻に関して「関屋香」と「盤

物関屋香」があるので、「源氏千種香」の実際の組香数は五十三となる⁽⁸⁾。「源氏千種香」では十二の盤物以外、四十一の組香で聞きの名目が指定されている。その聞きの名目は、巻名に拠るもの、物語の登場人物に拠るもの、証歌に因んだもの、物語本文から採られたものなどがある。しかし、物語には出てこない言葉が登場したり、物語の和歌を典拠としながらも名詞化されているもの、物語内容に則しながら、五語ないし七語にまとめられているものなど、様々である。しかも、それらの中には『源氏小鏡』の寄合と同一のものが存在している。そして、寄合の言葉が物語の進行に従って並べられているのと同様に、聞きの名目もほぼ時系列に並んでいる。

では「源氏千種香」の「須磨香」を例に、聞きの名目と源氏寄合を比較してみよう。

「須磨香」では、『源氏物語』本文には見出せない言葉五例(庭のやり水・みちのく紙・花の盃・波こしもて・柴の煙)が聞きの名目となっている。これは、聞きの名目を持つ四十一の組香中で最多であり、注目すべき例である。その内の三例(庭のやり水・みちのく紙・花の盃)は『小鏡』諸本の寄合と一致し、一例(柴の煙)は『小鏡』の地の文から生まれた聞きの名目と考えられる。

一方、『小鏡』は、本文と歌によって綴られる第五系統本(梗概中心本系)と歌を多数増補した第六系統本(和歌中心本)では、寄合の言葉が省かれている⁽⁹⁾。したがって本稿では『小鏡』第一系統本から第四系統本、十本における「すま」の源氏寄合との関連をみることにする。「須磨香」は左記のように記されている。(強調部が聞きの名目で、筆者による)

一 一四包つ、試あり。 源氏 二包、試なし。
右一二、二包つ、四包の中へウを一包入、五包つ、にして五包を前

とし、五包を後とす。

前五包、二炷き、一度、三炷き、一度、五包を両度にきく也。後の五包も同前也。

二炷き、の時、

一一 若木の桜 一二 庭のやり水 一二 松のはしら

二一 竹の垣 二二 源氏 二二 須磨

三炷き、の時、

二ウ二ウ一 源氏 三三二ウ二 須磨

ウ二二 伊勢の使 ウ二二 みちのく紙 一ウ二 花の盃

二ウ一 友ちとり 一一一 頭中将 一一二 ねさめの床

二二一 巳の日の祓 二二二 ひち笠雨 一二二 四方の嵐

二二一 波こしもて 二二二 柴の煙 一一一 立来ル浪

(『香道蘭之園』「源氏千種香」)

これら聞きの名目は、物語の「須磨には、いとど心づくしの秋風に」で始まるあたりから、須磨での寓居の様子、三位中将となった頭中将の訪問、三月上巳の祓いの日、暴風雨に襲われる場面まで(『新編日本古典文学全集 源氏物語②』一九八―二一九頁)の広範囲から採用されている。この組香では、前後二回、五炷の香を二炷聞き、三炷聞きで味わうのだが、二炷聞きでは、源氏の須磨の家居のあり様を思い浮べ、三炷聞きでは源氏の閑居のわびしさや都の人々との消息のやりとり、三位中将の訪れや弥生巳の日の禊、そして突然の暴風雨などの場面がイメージされていく。

先述の通り、「庭のやり水」「花の盃」「波こしもて」「柴の煙」は物語本文に見出せない言葉であり、「みちのく紙」は「陸奥国紙」の形で末摘花巻、賢木巻、明石巻、蓬生巻、玉鬘巻、胡蝶巻、若菜上巻、橋姫巻、宿木巻に各一例ずつ見出せるものの、肝心の須磨巻には登場しない。

「若木の桜」「松のはしら」「友ちとり」「ねさめの床」「ひち笠雨」「四方の嵐」は物語本文の表現と一致するが、「竹の垣」「伊勢の使」「巳の日の祓」「立来ル浪」は、若干、改変されている。即ち、「竹の垣」は物語の「竹編める垣しわたして」に基づき、「伊勢の使」は「かの伊勢の宮へも御使ありけり」「巳の日の祓」は「弥生の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思すことある人は、禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおそろかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓せさせたまふ」から、生まれた言葉ではなからうか。また「立来ル浪」は「枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して」を踏まえた表現と考えられる。また「波こしもて」は「波ただこもと」の誤写という可能性もある。

しかし、組香の考案者がこれらの言葉も創作したのであろうか。

では次に、『小鏡』第一系統本から第四系統本「すま」の寄合を見てみよう（資料1参照）。

第一系統京都大学本では、四十七の寄合が登場し、そのうち「わかきのさくら・にはのやりみつ・まつのはしら・ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・たちくるなみ・みちのくかみ・はなのさかつき・ひちかさ雨・みの日のはらい」の十一語が「須磨香」の聞きの名目と一致する。同じく第一系統宮内庁書陵部本では、「わかきのさくら・庭のやり水・まつのはしら・ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・みちのくかみ・みの日のはらい」の八語が一致。国会図書館本でも「若木のさくら・松のはしら・ともちとり・ねさめのとこ・伊勢の使・みちのくかみ・ひちかさ雨」七語が一致した。第二系統神戸親和女子大学本でも十一語、第三系統光源氏一部連歌寄合之事では十語、第三系統都立中央図書館本では五語、国文学研究資料館本では九語、天理図書館本では四語が、第四系統の神宮文庫本では十語、大阪市立大学本では十二語が一致。

『小鏡』諸本「すま」巻収載の寄合数を見ると、第三系統（増補本系）都立中央図書館本が二十八語で最も少なく、同じく第三系統光源氏一部連歌寄合之事が九十六語と最も多かった。それ以外の諸本の寄合の数を平均すると、約四十八語であり、個々の寄合に小異はあるものの大きな違いは認められない。このことについて、伊井春樹氏は、

（『源氏小鏡』）和歌は青表紙本による改訂という、後人の手が明らかに加えられたが、（寄合の）詞の方は一語一語本文から検索してその異文の有無を調べるのが困難だったのであろう、ほとんど無修正のまま継承されている。

（『源氏物語注釈史の研究 室町前期』）
桜楓社、一九八〇年、九四三頁）

と記されている。なお（ ）内は筆者による補記である。

では、「竹の垣」「伊勢の使」「巳の日の祓」「立来ル浪」について見てみよう。第二系統神戸親和女子大学本は「たけのかき」、第四系統大阪市立大学本では「竹のかき」、第一系統京都大学本では「竹かき」、国会図書館本では「たけかき」、第一系統宮内庁書陵部本と第三系統光源氏一部連歌寄合之事と国文学研究資料館本では「竹あめるかき」、第四系統神宮文庫本では「竹のすかき」となっている。第一系統宮内庁書陵部本と第三系統光源氏一部連歌寄合之事および国文学研究資料館本は、『源氏物語』の「竹編める垣しわたして」に忠実と言えよう。

「伊勢の使」については、第一系統国会図書館本が「伊勢の使」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事が「いせのつかい」、天理図書館本が「伊勢のつかひ」であり、第四系統神宮文庫本には「伊せのつかひ文」とある。

「巳の日の祓」は、第一系統京都大学本と宮内庁書陵部本に「みの日のはらい」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事に「みのひのはらひ」、第

四系統大阪府立大学本に「みの日のはらひ」、第二系統神戸親和女子大学本は「みの日のはらへ」、第四系統神宮文庫本は「巳の日のはらへ」、第一系統国会図書館本には「はらひ」と「みの日」に分割された形で載る。

「立来浪」については、第一系統京都大学本と第二系統神戸親和女子大学本が「たちくるなみ」、第三系統国文学研究資料館本と第四系統大阪市立大学本が「立くる波」、同じく第四系統神宮文庫本が「立ちくる波」であった。第一系統宮内庁書陵部本では「浦なみ立くる」、国会図書館本では「おちくるなみ」となっていた。

「竹の垣」「伊勢の使」「巳の日の祓」「立来浪」は小異はあるものの『小鏡』の寄合に合致するのである。

では、『源氏物語』には見出せない言葉「庭のやり水」と「花の盃」はどのように解釈できるのだろうか。

「庭のやり水」は、第一系統京都大学本が「にはのやりみつ」。第三系統光源氏一部連歌寄合之事が「にわのやりみつ」。第一系統宮内庁書陵部本、第三系統国文学研究資料館本、第四系統大阪市立大学本が「庭のやり水」。第二系統神戸親和女子大学本と第四系統神宮文庫本が「庭の遣水」となっている。また第一系統国会図書館本では「やりみつ」となっていた。

第一系統京都大学本のこの部分では、

わかきのさくら。にはのやりみつ。にはのくさ。松のはしら。いしのはし。竹かき。
これらはすまのいゑゐのしきなり。

(『源氏小鏡』諸本集成) 和泉書院、二〇〇五年、二三頁)

と記されている。「にはのくさ」も「にはのやりみつ」同様に、青表紙本や河内本、別本の諸本からは見出せない言葉である。

また「花の盃」も『小鏡』第一系統京都大学本では、

おなしなみた。雲ぬにひとり。くろこま。こまふゑ。はなのさかつき。
これらは、中しやうのおはしたるとき（中將）の事ともなり。

と記され、これは『源氏物語』での、源氏と三位の中將による

御土器まゐりて、「酔ひの悲しび涙灑ぐ春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。
(『新編日本古典文学全集 源氏物語②』二一五頁)

に拠って生じた寄合と考えられる。「花の盃」については、第三系統国文学研究資料館本以外の『小鏡』九本に見出される。第一系統京都大学本と第二系統神戸親和女子大学本では「はなのさかつき」、第三系統都立中央図書館本は「花のさかつき」、第四系統神宮文庫本は「花盞」、大阪府立大学本は「花の盃」と記されている。また、第一系統国会図書館本では「花のさかき」と記されている。第一系統宮内庁書陵部本と第三系統光源氏一部連歌寄合之事には「はるのさかづき」、天理図書館本では「春のさかつき」となっていて、物語の「春の盃の裏」に忠実であると言えよう。

物語の須磨巻には登場しない「みちのく紙」については、第三系統光源氏一部連歌寄合之事に「五六まいそかしみちのくのかみ」。第二系統神戸親和女子大学本と第三系統天理図書館本を除く七本には、「みちのく紙」そのままの形で見出された。「波こしもて」という寄合は存在しない。

このように、『源氏物語』本文には見出せない「庭のやり水」「みちのく紙」「花の盃」が、『源氏小鏡』諸本の寄合と一致を見ることは、単なる偶然であるとは考えにくい。

物語には登場しない言葉で、『源氏小鏡』諸本の寄合と一致する聞きの名目は、「須磨香」以外にも複数見られるので、次に挙げてみる。

「夕顔香」の「荒れたる宿」は、物語では末摘花巻と花散里巻にそれぞれ「荒れたる宿」が一例ずつ、滯標巻に「あれたる宿」が一例の合計三例が見られ、夕顔巻には見えない。「蓬生香」にも「あれたる宿」は聞きの名目として登場し、『源氏小鏡』の「ゆふかほ」巻、「よもきふ」巻には、寄合として「あれたるやと」が挙げられている。

また物語の賢木巻では、「浅茅が原もかれがれなる虫の音に」「風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も」という記述はあるが、「むしの声」という言葉は存在しない。『小鏡』諸本「さかき」巻を見ると、第一系統京都大学本、第一系統宮内庁書陵部本、第二系統神戸親和女子大学本に「むしのこゑ」の寄合が見られる。近い言葉として「むしの音」という寄合があるのは、第三系統光源氏一部連歌寄合之事、都立中央図書館本、国文学研究資料館本であり、「松むし」は、第一系統から第四系統の『小鏡』十本すべてに登場し、「かれくくなるむしの音」が第三系統国文学研究資料館本に一例見られた。

同様に「明石香」の「むかへ船」「追風」「三とせの別」「初音香」の「五はの松」「篝火香」の「夕闇」「秋の初風」「野分香」の「風のとむらひ」「巻柱香」の「火取りの灰」「竹川香」の「花の賭物」「榎本香」の「宇治の中宿」「早蕨香」の「都へ出ル」「浮船香」の「泥障敷」「里びたる犬」なども、『源氏物語』それぞれの巻には、そのままの形では見出せない言葉であるが、『小鏡』諸本には寄合として登場している⁽¹⁰⁾。

また聞きの名目の中には、『小鏡』の寄合の言葉を分割して成立したと考えられるものもある。「柏木香」の「誰か世」「蒔し種」は『小鏡』の「たか世にまきしたね」⁽¹¹⁾を「誰か世」と「蒔し種」に分けたものと考えられる。『小鏡』第一系統京都大学本、第一系統宮内庁書陵部本、第三系統光源氏一部連歌寄合之事、国文学研究資料館本には「たか世に

まきしたね」、第一系統国会図書館本では「たか世にか、まきしたね」、第二系統神戸親和女子大学本では「たかよにまきし種」、第三系統都立中央図書館本は「たかよにか、まきしたね」、第四系統神宮文庫本は「誰か世には種まきし」、第四系統大阪市立大学本は「たか世にか。まきしたね。」とあり、第三系統天理図書館本は寄合にこの言葉が登場していない。第一系統国会図書館本、第三系統都立中央図書館本、第四系統大阪市立大学本それぞれの寄合の段階で、すでに分割の兆しが窺えるようである。「竹川香」の「碁の勝」「碁の負」も、『小鏡』の「このかちまけ」⁽¹²⁾が二つに分割された例ではなからうか。第一系統京都大学本、第一系統国会図書館本は「このかちまけ」、第二系統神戸親和女子大学本は「碁のかちまけ」、第四系統大阪市立大学本も「碁のかちまけ」、第三系統都立中央図書館本に「このせうぶ」、第四系統神宮文庫本も「碁の勝負」、第三系統国文学研究資料館本には「碁。かちまけ」、第一系統宮内庁書陵部本は「このかけ物」であった。第三系統光源氏一部連歌寄合之事と天理図書館本には地の文に碁打ちのことは記述されるものの、寄合としては登場しない。

また『小鏡』の寄合の一部分を聞きの名目にしたと考えられるものもある。それは「早蕨香」の「古郷の名残」である。『小鏡』第一系統京都大学本には「こきやうのなこりのおしき心ねを、つけさせ給ふへし。」という記述があり、ここから「古郷の名残」が生まれた可能性があるのではなからうか。第一系統宮内庁書陵部本では「ふる里のなこりおしき心ねをすへし」、第二系統神戸親和女子大学本は「ふるさとの名残のおしき心ねをつくへし」、第三系統光源氏一部連歌寄合之事には「ふるさとのなこりおしき心ねを付べし」、都立中央図書館本は「ふるさとのなこりおしき心につけへし」、第四系統神宮文庫本では寄合として「古里の名残」が登場し、第一系統国会図書館本と第三系統国文学研究資料館本、第三系統天理図書館本、第四系統大阪市立大学本には該当の記述は

見られなかった。

本章では「須磨香」の聞きの名目と『源氏小鏡』の源氏寄合との関連を糸口に、「須磨香」以外でも、『源氏物語』に登場しない言葉や、そのままの形では見出せない言葉を、聞きの名目として使っていること、それらの中には、『源氏小鏡』諸本の寄合と同一のものが存在することを提示した。

次章では、『小鏡』の寄合や「なにがしと、つけへし。」と指示された言葉からではなく、『小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目を検討したい。したがって、寄合の言葉は省かれていて本文と歌によって綴られる第五系統本（梗概中心本系）、歌を多数増補した第六系統本（和歌中心本）をも含めた十四本の『小鏡』諸本を用いて考察する。

第二章 『源氏小鏡』地の文から生まれたと考えられる聞きの名目

本章では「須磨香」の「柴の煙」、「明石香」の「只ならぬ身」、「朝顔香」の「いつき」「神のいかき」、「篝火香」の「夏の遅月」、「巻柱香」の「大姫君」、「浮船香」の「あらはれ文」、「九条わたり」「こたま」「小野の尼」について、『小鏡』諸本の地の文との関連を考えたいと思う。これら聞きの名目は、いずれも『源氏物語』本文や『小鏡』諸本の寄合に見出されない言葉である。

一、「須磨香」の「柴の煙」

前章でも取り上げた須磨香の聞きの名目の内、「柴の煙」は、『源氏物語』には見られない言葉であり、かつ『小鏡』諸本須磨香の寄合にも登場していない。まず、物語ではこの場面がどのように描かれているかを見ておこう。

煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと思しわ

たるは、おはします背後うしろの山に、柴といふものおすぶるなりけり。

（『新編日本古典文学全集 源氏物語② 二〇七～二〇八頁』）

次に、この場面の『小鏡』諸本の地の文を次に挙げてみる。

第一系統京都大学本

又、すまに「しは」といふ事は、おはしますうしろのやまにたつけふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物おりくふるけふりなり。

第一系統宮内庁書陵部本

又、すまに「しは」といふは、あたまへるうしろの山に立けふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物ふすふるけふり也。

第一系統国会図書館本

ところは、ゆきひらの中なこん、このうらになかされて、「もしほたれつ」と、よみけん所、ちかき程なれば、うしろの山にたつけふりを、御らんしなれぬ事なれば、「何そ」とたつねたまへは、しはおりくふるなり。

第二系統神戸親和女子大学本

又、すまに、「しは」といふことは、おはしますうしろの山に、たつけふりを、なにそとたつね給へは、しはといふ物、折くふるけふりなりと、御覧しなれず、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

又しほという物とはおはしますうしろの山にたつけふり何そとたつね給へはしほといふ物をおりくぶるた木、のけふり也といふけんし
また御らんしなれずして

第三系統都立中央図書館本

うしろの山にけふりたつを、「なにそ」とたつねさせ給へは、「しは」といふ物、おりくふるけふりなり」と申。

第三系統国文学研究資料館本

これは、おはしますうしろの山にたつ煙を、「なにそ」ととひ給ふに、「柴といふもの、おりくふる、薪のけふりなり」といふ。

第三系統天理図書館本

又、柴と云物、折くふる。けんし、いまた御らんしたまはず、うしろの山にあたりて、けふり立、めつらかにおほして、

第四系統神宮文庫本

又、「しは」といふ詞は、後の山に立煙を、何そとたつね給へは、柴といふ物、折くふる煙也。

第四系統大阪市立大学本

又、須磨に、「柴」といふことあり。「うしろの山に立煙」など付へし。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

「うしろの山にたつけふりは、なにそ」と、ひ給へは、「しはといふ物、おりくふる也」と申せは、御覧しなれすして、御歌あり。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

うしろの山にたつけふり、何そととひ給ふに、柴やく煙、源氏いた御覧しなれす、あそはし給ふ。

第五系統天理図書館本（連蔵筆）

該当記述なし。

第六系統京都大学本

該当記述なし。

これらを見ると「しは」と「うしろの山にたつけふり」が繰り返され、第四系統大阪市立大学本では「柴」といふことには、「うしろの山に立煙」など付へし。」と指示している。

これらのことから、「しは」と「けふり」を用いて「柴の煙」という聞きの名目が生まれた可能性も考えられるのではなからうか。

二、「明石香」の「只ならぬ身」

まず「明石香」の題材となる場面を確認しておく。迎えの船をよこした入道によって嵐から救い出された源氏が、明石の浦の館に移り、入道の希望を入れて、岡辺の宿に住む入道の娘・明石の君に文を送り、やがて二人は結ばれる。しかし、都の許しがおりに急遽、源氏は帰京することになり、身もつた明石の君に琴を残して、明石の浦をあとにした。

「只ならぬ身」は懐妊の身をいう婉曲表現であるから、明石の君を指しているわけだが、『源氏物語』の明石巻には「ただならぬ」という言葉は見られず、「ただならず」が四例あり、いずれも明石の君の懐妊をほのかす場面で使われているのではない。一例目の「ただならず」は、紫の上の返歌の書きぶりについての描写、二例目は、都にのこされた紫の上の源氏に寄せるひとかたならぬ思いの深さを、三例目は、入道の娘を源氏に取り持ったいきさつを人々に噂される良清の穏やかならぬ思いを、そしてあと一例は、源氏と再会したものの、明石の君をめぐっての源氏の裏切りを恨む紫の上の描写で、この言葉は使われている。『小鏡』諸本の寄合にも「只ならぬ身」は存在しない。物語本文は明石の君の懐妊をどのように描いているのだろうか。

そのころは夜離れなく語らひたまふ。六月ばかりより心苦しき気色ありて悩みけり。

〔新編日本古典文学全集 源氏物語②〕二六三頁

では「只ならぬ身」という言葉は、どこから登場してきたのであろうか。『小鏡』諸本の該当部分を挙げて見る。

第一系統京都大学本

さて、このむすめ六月ころより、た、ならずなりたりしを、御らん

しをきて、八月にみやこへめしかへされたまふ。

第一系統宮内庁書陵部本

さて、かのむすめ、六月よりた、ならず成しを御らんしおきて、八月にみやこへめし返され給ふ。

第一系統国会図書館本

さて、此ひめ、六月の頃より、た、ならずなりしを、おきて、その年の八月に、みやこへめしかへされ給ふ。

第二系統神戸親和女子大学本

扱このむすめ、六月のころより、た、ならずなりたりしを御覽しをきて、八月に都へめしかへされ給ふ。

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

さてこのむすめみな月の比よりた、ならずなりたりしを御らんじおきてげんじ八月にみやこへめし返し給ふ。

第三系統都立中央図書館本

かのむすめ、六月ころより、た、ならずありしを御らんしをきて、八月にみやこへめしかへされ給ふ。

第三系統国文学研究資料館本

さて此娘、六月の頃より、た、ならず成たりしを御らんして、源氏は八月に都へめしかへされ給ふ。

第三系統天理図書館本

姫君、六月の頃より、た、ならず御らんしをきて、八月、宮こへめしかへされ給ふ。

第四系統神宮文庫本

さて此むすめ、六月の頃より、た、ならずなりしを御覽しおきて、八月に都へめしかへされ給ふ。

第四系統大阪市立大学本

かのむすめ、た、もなくなり給へは、明石にと、めをきまいらせて、

其御はらに出来給ふ姫宮を、相くして後に、都へめしほせ給ひて、出来給ふひめ宮をは、源氏の御はからひにて、紫のうへの御子にしまいらせて、つゝに、とうくうの后になしまいらせられけり。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

かのむすめを、あかしのうへといふ。この御はらに、ひめ君いてき給ふ。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

さて此娘、六月頃よりた、ならず候へは、入道よろこひ、かきりなく候へは、八月、都よりちよくしたちけるは、源氏も此姫君に名残おしくおほしめし、

第五系統天理図書館本（連藏筆）

さて、入道のむすめのはらに、ひめきみ一人うまれたまふ。あかしの中くふとは、これなり。

第六系統京都大学本

さて、御方、はやた、ならず成給ふ。

『小鏡』十四本のうち、第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）と第五系統天理図書館本（連藏筆）に、「た、ならず」の言葉が見出せなかつたが、第四系統大阪市立大学本の「た、もなくなり給へは」も含めて、十二本の『小鏡』地の文で「た、ならぬ」が明石の君の懐妊を表す言葉として使われていた。『小鏡』地の文の描写が反映しての聞きの名目「只ならぬ身」となったのではなからうか。

三、「朝顔香」の「いつき」と「神のいかき」

「朝顔香」は、「見しおりの露わすられぬ朝顔の花のさかりは過やしぬらん」が証歌に据えられた組香で、「いつき・おりる・あさかほ・盛り過・加茂・神のいかき・桃菌」が聞きの名目に指定されている。このうち「い

つき」と「神のいかき」は、『源氏物語』の朝顔巻では見られない言葉である。物語では、「いかき」は「斎垣」で賢木巻に一例と若菜下巻に一例、「いつき」は「賀茂のいつき」で賢木巻に一例見られる。しかもこの二語は『小鏡』朝顔巻の寄合としても登場していない。

『小鏡』諸本の該当部分を見ると、次のような記述となっている。

第一系統京都大学本

このさいゐん、かものいつきにておはしまし、。かみのいかきのうちまでも、御心にかけて申しかよはせ給へとも、

第一系統宮内庁書陵部本

此齋院、かものいつきにておはしませし、神のゐかきの内までも、御心にかけて申かよはせ給へとも、

第一系統国会図書館本

此のさいゐんと申は、かものいつきにておはせしを、神のゐかきのうちまでも、御心にかけて申、かよはし給へとも、

第二系統神戸親和女子大学本

さいゐん、かものいつきにおはしまし、かみのいかきのうちまでも、御心にかけて、申かよはせ給へとも、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

かのさいゐんかものいつきにておはしまし、時、かみのいがきの中までも、御心にかけて、申かよはせ給へとも、

第三系統都立中央図書館本

此さいゐん、かものいつきにておはします、かみのいかきのなかまでも、御心にかけてかよはせ給へとも、

第三系統国文学研究資料館本

かのさいゐん、賀茂のいつきのみやにておはしまし、時、神のいかきのうちまでも御心かけて申かよはせ給へとも、

第三系統天理図書館本

檀のさい院とて式部卿の宮の姫君、加茂のいつきの宮とおはしける、おりゐの後、さきのさいゐんと申。—中略— 此こゝろは、神のゐかきのうちまでも、心にかけて給へ共

第四系統神宮文庫本

此齋院、^(かもか)かりに齋^(つと)にておはしまし、かみのゐ垣のうち迄も、御心にかけて申かよはせ給へとも、

第四系統大阪市立大学本

あさかほのさいゐんとて、式部卿の宮の御むすめ、かものいつきにそなはり給ひしか、おりゐさせ給ひて、さきのさいゐんとぞ申ける。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

かものさい院にておはしける時、神のゐかきのうちまでも御心にかけて申かよはせ給へとも、

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

あさかほの齋院とて、式部卿の姫君、かものいつきにておはしまし、おりゐさせ給ひて、—中略— 此齋院を、神のいかきのうちまでも、御心にかけて申かよはせ給へとも、

第五系統天理図書館本（連蔵筆）

かものさいゐんにたちたまふ。しかるに、しきふきやううせたまへは、さいゐんいつきのみやをいて、御ふくのほと、も、そのにす

みたまふ。

第六系統京都大学本

賀茂の齋院、おりゐさせ給ぬ。

右のような結果で、第三系統天理図書館本と第四系統大阪市立大学本、第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）の描写が似ており、第一系統京都大学本から第三系統国文学研究資料館本、そして第四系統神宮文庫本、

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）の合計九本がほとんど同じ文言であった。寄合としては、第一系統から第四系統の『小鏡』諸本で、「あさかほ」も、その「こころつよき」などが挙げられていた。「いつき」神のいかきも、『小鏡』地の文から生まれた聞きの名目と考えられようか。

四 「篝火香」の「夏の遅月」

「篝火香」は「か、りひに立そふ恋の煙こそ世にはたへせぬほのをなりけれ」が証歌に据えられ、琴を枕に、源氏が玉鬘に添い臥す場面が題材の組香である。香組も、試み無しのウ「篝火」を聞き当てるが高得点を得られるルールとなっている。聞きの名目は「夕やみ・琴を枕・夏の遅月・たそかれ・玉かつら・秋の初風・源氏・恋の煙・か、りひ」である。このうち、『源氏物語』本文にも『小鏡』寄合にも見出せない言葉が、「夏の遅月」である。物語では、証歌とされた和歌のすぐ前に源氏の言葉として、

「絶えず人さぶらひて点しつけよ。夏の、月なきほどは、庭の光なき、
いとものむつかしく、おぼつかなしや」とのたまふ。

（『新編日本古典文学全集 源氏物語③』二二五七頁）

とあり、この描写から「夏の遅月」が生まれたものかと推測した。しかしここでは「月なきほどは」で、「遅い」の語は見当たらない。

では『小鏡』諸本の描写を見てみよう。

第一系統京都大学本

なつの夜の月、をそくいづるころ、御まへに、か、りひともして、
御ことなど、おしへさせ給ひけるときの御うたに、

第一系統宮内庁書陵部本

夏の夜の月おそく出る頃、御まへにか、り火とほして、ことなどおしへさせ給ふとて、

第一系統国会図書館本

月なきころにて、御まへのやりみつに、か、りなきも、させ給ひし、
此事なり。

第二系統神戸親和女子大学本

夏のよの月なきころ、すこしくもれるけしきに、篝火をともし、
御琴などを調させ給ふ。

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

なつこのよの月おそくいづる比御まへにか、りひともして御ことおし
へさせ給ひける時の御歌に、

第三系統都立中央図書館本

なつの夜、月おそくいづるころ、御せんにか、りひとほして、御こ
となど、をしへ給ふとて、

第三系統国文学研究資料館本

夏の夜の月、をそく出るまゝに、御まへにか、り火をともし、御
琴を、しへさせ給ふ時のうたに、

第三系統天理図書館本

夏の夜の月ほそく出る頃は、御前へか、り火とほして、御琴をしへ
給ふときの歌、

第四系統神宮文庫本

夏の夜の、月おそく出る頃、御前に篝火をともし、御ことを調へ
させ給ひけるに、

第四系統大阪市立大学本

夏の夜の、月ほそく出る頃、御前にか、り火ともして、物などおし
へさせ給ひ、其時の御歌也。

第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）

該当記述なし。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）

夏頃なれば、夜月おそく、いて給ふに、御前にか、火ともして、御ことなどおしへさせ給ふとて、

第五系統天理図書館本（連藏筆） 該当記述なし。

第六系統京都大学本

さて、月おそくいつる夜、御まへにか、りたかせて、琴などをしへたてまつり給ひける時、

夏の夜の月が遅く出る、という記述は、第一系統京都大学本、宮内庁書陵部本、第三系統光源氏一部連歌寄合之事、都立中央図書館本、国文学研究資料館本、第四系統神宮文庫本、第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）、第六系統京都大学本の八本に見られた。第三系統天理図書館本と第四系統大阪市立大学本の「月ほそく出る頃」の記述は、書写本ゆえの誤写の可能性もあるのではなからうか。

いずれにしても、八本の『小鏡』に共通する「夏の夜の月おそく」から、「夏の遅月」という聞きの名目が生じた可能性が考えられる。

五 「巻柱香」の「大姫君」

「巻柱香」は、玉鬘のもとに出かけようとしていた鬘黒に、北の方が突然錯乱して火取の灰を浴びせかける事件が題材である。香組は三炷香と同じであるが、試みなしの三種の香を五包ずつ用意し、打ちませた後、三包ずつ五度聞くという、かなり難しい組香である。

聞きの名目は「もの、け・火とりの灰・ひけくろ・大姫君・巻柱の君」で、大姫君の語が誰を指すのかが不審であった。またこの事件の場面では巻柱（『源氏物語』では真木柱）は登場しないので、聞きの名目に「巻柱」が並ぶのは唐突な感じもする。物語巻名由来の、鬘黒の邸を去るにあたっての真木柱の詠歌の場面ではなく、組香ゆえに、「火取りの灰」

が登場するドラマティックな場面が選ばれたと言えようか。

ところが、物語の真木柱巻には「大姫君」は見当たらない。貴人の長女を意味する「大姫君」という言葉が登場するのは、匂兵部卿巻である。

大殿の御むすめは、いとあまたものしたまふ。大姫君は春宮に参りたまひて、
（『新編日本古典文学全集 源氏物語③』一九頁）

ここでの大姫君とは夕霧の娘をさしている。貴人の娘ということならば、真木柱、そして式部卿の娘である鬘黒の北の方も該当者となりうる。すでに「巻柱」は聞きの名目に登場しているので、ここでは、鬘黒の北の方を指しているであろうか。

『小鏡』諸本の記述から、誰のことであるかがわかった。

第一系統京都大学本

むらさきのうへには、へちはらの御あね、しきふきやうのみやの大ひめきみにて、

第一系統宮内庁書陵部本

紫のうへにはへちはらの御あね、しきふ卿のひめ君にて、

第一系統国会図書館本

御おや、むらさきのうへのち、兵部卿の宮也。この北の方、むらさきのうへにも御あねそかし。

第二系統神戸親和女子大学本

むらさきの上には、別腹の御あね、式部卿の宮の大ひめ君にて、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

むらさきの上にはべつふくの御あねしきぶきやうの宮のおふひめきみにて、

第三系統都立中央図書館本

むらさきのうへのへつはらの御あね也。しきふきやうのひめきみにて、

第三系統国文学研究資料館本

もとの北のかたは、しきふ卿の宮の姫君にて、むらさきのうへの御ためには、はらかはりの御あねなり。

第三系統天理図書館本 該当記述なし。

第四系統神宮文庫本

紫の上には、別腹の御姉、式部の四の宮の姫君にて、

第四系統大阪市立大学本 該当箇所なし。

第五系統天理図書館（伝飛鳥井宋世筆） 該当記述なし。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆） 該当記述なし。

第五系統天理図書館本（連蔵筆）

このまきはしらのむすめのは、は、むらさきのうへの御あねなり。

第六系統京都大学本 該当箇所なし。

第一系統京都大学本と第二系統神戸親和女子大学本に「大ひめきみ」

第三系統光源氏一部連歌寄合之事に「おふひめきみ」の言葉があり、式

部卿の娘で紫の上の腹違いの姉である、鬚黒の北の方を指していること

がわかった。北の方は式部卿の長女であるので、第四系統神宮文庫本で

の「式部の四の宮の姫君にて」は誤りである。いずれにしても、「大姫君」

が聞きの名目に採用されたのは、地の文にこの言葉があったからこそで、

『小鏡』 享受の頭かな例とも言えるのではなからうか。

六、「浮船香」の「あらはれ文」「九条わたり」「こたま」「小野の尼」

「浮船香」は香組（組香のテーマに沿って、香りでその情趣をよりよく表現するための香木の選択や組合せのこと）に物語が反映されていて、
趣き深い組香である。まず「浮船香」の記述から紐解こう。（傍線部・

*は筆者による

一 二 三 三包つ、試あり。 ウ 三包、試なし。
右十二包打合、二包つ、むすひ合、二炷き、也。かほる方、匂ふ宮
方両方へわかる。

二炷の組合の名目、両方の記録かはる也。

かほる方

一 一 宇治橋 二 一 なかき契 三 一 絶せしを

二 二 浪越る 三 二 末の松 三 二 待らんとのみ

三 三 左近* 三 三 薫の使 三 三 家作りする

匂宮方

一 一 年ふとも 二 一 あらはれ文 三 一 侍従

二 二 かはらん物 三 二 泥障敷 三 二 宮の使

三 三 橋の小嶋 三 三 里ひたる犬 三 三 九条わたり

両方ともに同じ名目

ウ 一 ウ 二 ウ 三 浮船

ウ 一 ウ 二 ウ 三 小野の尼

かほる

宇治橋のなかき契りは絶せしをあやふむかたに心さわくな

匂ふみや

年ふともかはらん物かたちはなの小嶋かさきにちきる心は

〔「香道蘭之園」「源氏千種香」〕

試み有りの三種の香九包と、試み無し的一种香三包の計十二包を、打
ちませた後、二包ずつむすび合せ、二炷聞きを六回行う。連中は、かほ
る方と匂ふ宮方にわかれて勝負していく。物語のストーリーに沿って、

かほる、匂ふ宮それぞれに相応しい聞きの名目が設定されていて、筋立てを追いながら、聞香が楽しめる仕組みになっている。

まずここで注目したいのは、証歌に据えられたかほるの歌である。この歌は現行の『源氏物語』では、次のようになっている。

宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわくな

〔新編日本古典文学全集 源氏物語⑥〕
一四五頁、傍線部は筆者による

これは青表紙本に拠るものなので、三句目が証歌のそれとは異なっている。このことについて、伊井氏は次のように指摘している。

『小鏡』は当初別本の源氏物語によって作成された。というのは『小鏡』の作者が所持したのは別本であり、それによってダイジェスト化したというのである。それは第一系統本に引用された和歌が、別本の異文を持っているのよって容易に知ることができる。

—中略—

うぢばしのながきちぎりはたえせじをあやぶむかたにこゝろさはぐな（浮舟一八八七）

とある「たえせじ」の箇所が、改訂本系では「くちせじ」と青表紙本に訂正されているが、異文の方は別本の高松宮家本・陽明家本・国冬本に一致する。

〔源氏物語注釈史の研究 室町前期〕桜楓社、
一九八〇年、八四一―八四二頁

したがって、「浮船香」の証歌も別本の異文を持つものをテキストとして用いた結果であり、既に指摘した「帚木香」証歌のこととも照らし

合わせる、「源氏千種香」考案に際し、古本系『小鏡』が介在した可能性を考えざるをえない。

第一系統京都大学本、国会図書館本、第四系統神宮文庫本は「うちはしのなかきちぎりはたえせしとあやぶむかたに心さはくな」。第三系統光源氏一部連歌寄合之事、都立中央図書館本、天理図書館本、第四系統大阪市立大学本は「うちはしのなかきちぎりはたえせしをあやぶむかたにこゝろさはくな」。第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）は「うち橋のなかき契りはたえにしをあやぶむかたに心さわくな」。第二系統神戸親和女子大学本と第三系統国文学研究資料館本は「宇治橋のながきちぎりはくちせしをあやぶむかたにこゝろさはくな」。第六系統京都大学本は「あやぶむかたに心さわくな」と脇に朱書つきで「宇治橋の長き契は絶せしを朽せぬものと猶たのめとや」とある。なお、第一系統宮内庁書陵部本、第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）、天理図書館本（連蔵筆）には該当和歌の記述はない。

では聞きの名目を見ていこう。かほる方の「浪越ゆる」「末の松」「待つらんとのみ」は、薫の詠歌

波こゆるころとも知らず末の松待つらんとのみ思ひけるかな

〔新編日本古典文学全集 源氏物語⑥〕一七六―一七七頁

による。

「左近」*（『香道蘭之園』宮内庁書陵部本及び国会図書館本）は、浮舟の乳母子「右近」の間違いと考えられる。匂宮方の「侍従」も「右近」とともに浮舟に近侍する者である。匂宮びいきの侍従に対して薫の長所を認め、薫と匂宮の間で苦悩する浮舟を慰めつつも戒める「右近」をかほる方の聞きの名目に、薫よりも匂宮に心ひかれ、匂宮の従者・時方とも親しくなる「侍従」を匂宮方の聞きの名目に据えるところは、気が利

いて面白。

「薫の使」「宮の使」は物語に見られない言葉であるが、『小鏡』の「大将のつかひと、みやの御使と、たひく行あひしかは」によるものと考えられる。「家作りする」も『源氏物語』本文には見られない言葉である。これも『小鏡』諸本の「殿つくり給ふ」や「いそきむかへ奉らんと、つくろひたまふ」「家をつくり給ふ」に拠ろうか。

では「あらはれ文」「九条わたり」「こたま」「小野の尼」について見ていこう。

「あらはれ文」は、薫、匂宮、双方の従者のはち合せに始まる、密事露見の鍵となる浮舟の手紙のことであり、それは大内記の手を経て、匂宮が読みふける「赤き色紙のいとよらなる」(『新編日本古典文学全集 源氏物語』一七三頁)文のことである。物語に「あらはれ文」の言葉はなく、『小鏡』の寄合には、「あらはるゝ心」はあるが「あらはれ文」はない。しかしこの「あらはるゝ心」の前に次のような文言がある。

第一系統京都大学本

みやの御つかひの、あらはれしおりの文の色は、さくらにつけて、あかきしきしなり。

第一系統宮内庁書陵部本 該当記述なし。

第一系統国会図書館本

宮の御使あらはれし文の色かみ、さくらに付けて、あかき(料)れう(紙)しなり。

第二系統神戸親和女子大学本

宮の御つかひの、あらはれしおりの文の色は、さくらに付けて、あかきしきし也。

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

みやの御つかひのあらわれしよりふみのいろはさくらにつけてあかき色かみ也。

第三系統都立中央図書館本

みやのつかひ、あらはれしおりの文のかみのいろは、さくらにつけて、あかきかみなり。

第三系統国文学研究資料館本

宮の御つかひ、あらはれし文の色は、桜につけて、あかきしきしなり。

第三系統天理図書館本

宮の使のあらはるゝより、其(いん)みやは、さくら、あかき色のかみ也。

第四系統神宮文庫本

宮の御つかひのあらはれし折のふみの色は、赤(料)きれう(紙)し、桜に付し也。

第四系統大阪市立大学本 該当記述なし。

第五系統天理図書館(伝飛鳥井宋世筆)

みやのつかひのあらはれし折の文は、さくらにつけて、かみの色あかきしきしなり。

第五系統京都大学本(飛鳥井重雅筆) 該当記述なし。

第五系統天理図書館本(連藏筆) 該当記述なし。

第六系統京都大学本 該当記述なし。

右のように「あらはれしおりの文」「あらはれし文」「あらはれし折の文」と小異はあるが、これらが「あらはれ文」の由来ではなからうか。宮の御使が現れたことと、文によって秘密が露見したこと。この二つの意味をもたせる、所謂、掛詞の機能を果たしているとも言えよう。

次に「九条わたり」について考えてみる。物語本文では、薫の浮舟引き取りに、先手を打ちたい匂宮が、隠れ家を画策する場面で、

わが御乳母の遠き受領の妻にて下る家、下つ方にあるを、「いと忍びたる人、しばし隠いたらむ」と語りたまひければ、いかなる人にかはと思へど、大事と思したるにかたじけなければ、「さらば」

と聞こえけり。

〔新編日本古典文学全集 源氏物語⑥〕一六三頁)

の記述があるが、ここでは「御乳母の、遠国の受領の妻となつて下国する者の家が下京にあるので」ということで、「九条わたり」の言葉は登場していない。しかし、『小鏡』諸本を見ると次のような記述がある。

第一系統京都大学本

みやは、「それよりさきに、むかへとりて御心のまゝに」と、おほして、御めのとのいゑ、九てうわたり^(巻)にあるところへ、うつろはせなど、人しれすかまへ給へは、

第一系統宮内庁書陵部本

みやは又、そえよりさきにむかへとらんと、こしらへ給ふを、

第一系統国会図書館本

宮は、それよりさきにむかへとりて、心のまゝにとおほして、「御めのとのいゑ、九条あたりに有所へうつろはん」と、人しれすかまへ給へは、

第二系統神戸親和女子大学本

宮は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝに」とおほして、御めのとのいゑ、九条あたりなる所へうつろはせなんと、人しれすかまへ給へは、

第三系統光源氏一部連歌寄合之事

みやわそれよりさきにむかへとりて心のまゝにと思して御めのとのいへ九てうわたりにある所へうつろはせなどして人しれすかまへ給へは、

第三系統都立中央図書館本

宮は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝに」とおほしめし、

御めのとのいへ、九条わたりにある所へうつろはせたとまつらんと、人しれすかまへ給へは、

第三系統国文学研究資料館本

宮は、「それよりさきにむかへとりて、御心のまゝにも」とおほして、御めのとの家、九条わたりにある所へうつろはせなんと、人しれすかまへ給ふ。

第三系統天理図書館本

宮は、それよりさきにむかひとりて、心のまゝにとおほしめして、「御めのとの家九条わたりに有所へ。」として、人しれすかまへ給へは、

第四系統神宮文庫本

宮は、「それより先にむかへとりて、御心のまゝに」と思召て、御めのとの家、九条わたりにある所へ移ろはせなど、ひとしれすかまへ給ふ。

第四系統大阪市立大学本 該当記述なし。

第五系統天理図書館（伝飛鳥井宋世筆）

みやの御かたよりは、それよりさきにむかへとりて御心のまゝにとあり。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆） 該当記述なし。

第五系統天理図書館本（連蔵筆） 該当記述なし。

第六系統京都大学本

宮の御方より、それよりさきに忍ひとらせ給ひ、御めのとの家、九条わたりにある所に移し給ひ、人しれすませ給へは、

右のように、該当記述のないものを除いて、第一系統宮内庁書陵部本と第五系統天理図書館本（伝飛鳥井宋世筆）以外の諸本九本に「九条わたり」の言葉があった。物語での「下つ方」が「九条わたり」と具体性を帯びた原因の所在は、これらの記述に拠ったものと考えられる。

では最後に、「こたま」と「小野の尼」について見てみよう。

『源氏物語』本文で「こたま」は、蓬生巻の末摘花が住む常陸の宮邸の荒廃ぶりに一例、手習巻で発見される浮舟の描写に三例、夢浮橋巻で、薫に浮舟発見時の様子を語る僧都の言葉に一例、計五例がある。浮舟をめぐる描写での「こたま」は、いずれも手習巻以降の登場である。「小野の尼」という言葉は物語には見られず、「小野にはべりつる尼ども」が手習巻（『新編日本古典文学全集 源氏物語⑥』三四六頁）にある。地名を指す用例での「小野」は、夕霧巻に三例、手習巻に二例、夢浮橋巻に二例。「こたま」「小野の尼」ともに浮舟巻には見られない言葉である。

『小鏡』諸本では、この二語はどこで登場してくるのであろうか。第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）を除く十三本の『小鏡』は、浮舟巻の後半に、浮舟入水の場面を描き、浮舟は「こたま」に誑かされ攫われ（第一系統宮内庁書陵部本に「こたま」に攫われたの文言はない）、平等院のうしろの大きな木のもと（うしろ戸、としているものもある。第四系統大阪市立大学本）に捨てられていたのを、初瀬詣での帰途、平等院に宿泊していた「小野の尼」に助けられ、小野の庵に連れていかれその後、出家した、と記述している。

第五系統京都大学本（飛鳥井重雅筆）の浮舟巻は、他の十三本の『小鏡』に比べ話が短く、次のような内容である。中の君に寄せた新年の挨拶の文面から、匂宮に居所を知られた浮舟が、薫をよそおい宇治を訪れた匂宮に強引に奪われる。その事実を苦慮する右近であるが、一夜明けても匂宮は帰らない。翌々朝ようやく、名残を惜しみつつつ京へ帰る匂宮と浮舟の間で交わされる和歌の記述で終っている。

『源氏物語』本文では、浮舟入水の場面は、小野の庵で介抱され意識を回復した浮舟が、失踪前後のことを回想する手習巻にあり、浮舟発見の場面も、回想場面に先立つ手習巻で描かれている。また物語では「宇治院」とされ、「平等院」とは書かれていない。ともあれ、第五系統京

都大学本（飛鳥井重雅筆）以外の十三本の『小鏡』浮舟巻が、『源氏物語』手習巻の話を先取りする構成になっている。手習巻を待たずして、浮船香の聞きの名目に「こたま」と「小野の尼」が登場することと関係があると考えられる。因みに手習巻の聞きの名目は「小野・山里・引板の音・軒の紅梅・手習の君」であり、全て物語本文に見られる語である。

以上、『源氏物語』本文や『小鏡』諸本の寄合に見出されない言葉で、『小鏡』地の文との関連が窺える十例の聞きの名目を検討した。

まとめ―「源氏千種香」聞きの名目と『源氏小鏡』諸本の関係の整理―

第一章で、「須磨香」を中心に、聞きの名目と『小鏡』諸本の寄合との関連を提示し、第二章では、『小鏡』の地の文から生まれたと考えられる十例の聞きの名目を検討した。その結果明らかになったことをまとめてみる。

一、「源氏千種香」では、四十一の組香で聞きの名目が指定されている。その聞きの名目は、巻名に拠るもの、物語の登場人物に拠るもの、証歌に因んだもの、『源氏物語』本文から採られたものなどがある。物語の和歌を典拠としながらも名詞化されたもの、物語内容に則しながら、五語ないし七語にまとめられたものなど様々である。そして、それらの中には、『源氏小鏡』諸本の寄合と同一のものが存在している。寄合の言葉が物語の進行に従って並べられているのと同様に、聞きの名目もほぼ時系列に並んでいる。

二、『源氏物語』本文には見られない言葉や、そのままの形では見出せない言葉が、聞きの名目として使われ、それらの中にも『源氏小鏡』諸本の寄合と同一のものが存在している。

三、『小鏡』の寄合の言葉を分割して生まれたと考えられる聞きの名目や、

寄合の言葉の一部分を聞きの名目にしたと考えられるものがある。

四、『小鏡』諸本の寄合や「なにがしと、つけへし。」と指示された言葉からではなく、『小鏡』の地の文から生まれたと考えられる聞きの名目が複数存在する。

資料2表に見る通り、本稿でとりあげた十例において「源氏千種香」と一致するのは、『源氏小鏡』諸本集成²所収の『源氏小鏡』のうちでは、第一系統（古本系）京都大学本のみであった。但し「浮船香」証歌が「絶えせしと」（傍線は筆者による）になっていた。第一系統（古本系）京都大学本に次いで、第四系統（簡略本系）神宮文庫本に近いが、これも「浮船香」証歌が「絶えせしと」になっていた。これらは単純な誤写として処理できるとしても、神宮文庫本には「巻柱香」の聞きの名目の根拠と考えられる「大姫君」の言葉がなく、「式部の四の宮の姫君」とされている記述は無視できない。

拙稿「源氏千種香」の依拠本を探る³でも、『源氏物語』と異なる点を持つ巻順、「篝木香」証歌、「玉葛香」衣配り、「梅枝香」薫物合、「若菜香下」女楽のすべてにおいて、第四系統神宮文庫本は、小異はあるものの、全く異なる項目や当該の記述を欠く項目を含まない点で、第一系統京都大学本の次点であった。しかし神宮文庫本の「篝木香」証歌の「その色や」は単純な誤写としても、「玉葛香」の「柳」と「柳うら」の相違がある点で、「源氏千種香」の依拠本と想定するにふさわしいとは言えなかった。

なお、『源氏小鏡』諸本集成⁴で、『古典文庫 良基連歌論集三』に一本が翻刻されているため省略された第三系統（増補本系）第一類『光源氏一部連歌寄合之事』（『古典文庫』所収本）によれば、「柴の煙」から「小野の尼」の十例ともに、古本系京都大学本と一致した。しかしこれも、「梅枝香」薫物合の記述が不完全であるので、やはり「源氏千種香」の依拠本にはなりえない。

以上の例のみによって、古本系京都大学本の系統を「源氏千種香」の依拠本と断言するのは飛躍があるとしても、それに近いものを用いたかという見当づけは可能である。具体的な依拠本を絞り込むことは今後の課題として残るにせよ、現在と異なり誰もが容易に『源氏物語』の原典を目にすることはできなかったであろうことや、中世・近世を通じて盛んに作られた『源氏物語』の梗概書の中で、『源氏小鏡』は特に多く愛読されたらしく、加えて香に関わった人には連歌の人が多かったことに鑑みると、『源氏物語』原典から直接「源氏千種香」が考案されたのではなく、そこに梗概書として連歌の教則本としても機能した『源氏小鏡』の介在があった可能性は十分であろう。

また『小鏡』地の文から生まれたと考えられる聞きの名目の存在については、聞きの名目成立までに源氏寄合が展開していったのと同様な過程を踏んだのではないかと考えた。

寺本直彦氏『源氏物語受容史論考』前編第二章第五節「源氏寄合」（四七九頁）に拠れば、

源氏寄合も源氏の和歌を本歌とするものがまず見られるのであり、連歌の寄合が和歌の本歌取と相似た性格をもつことが見出される。

とし、それがさらに、（同書、四八五頁）

和歌の本歌取が、和歌を中心とする場面の詞句、ひいては和歌を離れた地の文に及んでいく現象は、連歌寄合にもいっそう自由に見られる。

と記されている。

「源氏千種香」の聞きの名目には『小鏡』と同一のものもあれば、『小鏡』

の地の文から考案された可能性のあるものもあった。「源氏千種香」の聞きの名目の多くが、『源氏小鏡』の源氏寄合から撰取されたとして、それは受動的かつ消極的な『小鏡』享受であり、さらに『小鏡』地の文から取り入れた言葉を使って、新たな聞きの名目を生み出したのならば、それは能動的で積極的な『小鏡』享受と言えるのではなからうか。それから聞きの名目は、物語の主題に関わる重要な場面だけでなく、派生的な枝葉とも言える場面をも髣髴とさせる言葉であり、物語理解を深め、聞香に文学的情趣を付与し、連歌寄合同様に、連中一座の共通理解の基盤となる機能を果たしていると考えられる。

「源氏千種香」が『源氏小鏡』古本系京都大学本系統かそれに近い本を使って考案されたとするならば、「源氏千種香」の原型は、『源氏小鏡』が版本によって読まれるようになる以前、室町時代には出来上がっていた、という推測もできるのではなからうか。

伊井氏は、

『源氏小鏡』は当初連歌用書の機能を持った書として出現したはずだが、読者の方は卷々の内容を知るダイジェスト版として多分に享受していった。
〔源氏物語注釈史の研究 室町前期〕

桜楓社、一九八〇年、九八二頁

と述べておられる。もしも『源氏小鏡』が「源氏千種香」の典拠として機能したのだとすれば、それは香という知的遊戯世界での『源氏小鏡』享受であり、源氏文化の世俗化への一役を担ったと言えよう。

注

(1) 本書を翻刻し、注と解説を付けたものに、尾崎左永子・薫遊舎校注『香道蘭之園』（淡交社、二〇〇二年）、尾崎左永子・薫遊舎校注『増補

改訂版 香道蘭之園』（淡交社、二〇一三年）がある。

(2) 伊井春樹氏は『源氏物語注釈史の研究 室町前期』（桜楓社、一九八〇年）「第二部 中世源氏学の周辺領域 第一章『源氏小鏡』の成立と影響」の第二節で、

『小鏡』の原初形態はおよそ百数十数余の歌を持つ本文だったと思われるが（第一系統本、古本系）、室町中期になって青表紙本により全面的に異文が正され、歌や本文も増補された（第二系統本、改訂本）。これが江戸期になつては各種の版本として流布することになる。このほか古本系からの派生本として、第三系統本（増補本）・第四系統本（簡略本）・第五系統本（梗概中心本）・第六系統本（和歌中心本）に分類することができる。（八一―九頁）

とまとめられ、また、

現存本は古本系に位置づけられた『小鏡』が原初形態であり、他の系統本はそれから派生していると認定することができるであろう。（八七八頁）

と述べ、さらに第一系統（古本系）第一類 京都大学本の伝承筆者・持明院基春について、次のように判断されている。

古本系諸本において、基春本は古形を保ち信頼するに足る善本だと思っている。持明院基春は基信の二男、天文四年（一五三五）七月美濃で没した。八十三歳（公卿補任）。当時の文化人として和歌・連歌を嗜み（新撰菟玖波集に二句入集）、多くの本を書写もしている。『源氏物語』関係については、『口伝抄』（宮内庁書陵部蔵）・『仙源抄』（京都大学図書館蔵・天理図書館蔵）などの識語にその名が見える。（八八〇頁）

このご指摘をもとに、岩坪健氏は、『源氏小鏡』諸本集成の解題で、

その底本（京都大学附属図書館蔵）の書写年代は、おおよそ基春が活躍した頃と見てよからう。（七六八頁）と論じられている。

(3) 『香道蘭之園』宮内庁書陵部所蔵御所本（二六三―八八五）

十卷五分冊、附録一卷一冊。縦二九・二センチ、横二一・二センチ、楮紙袋綴、全四九一丁、一面およそ十行書き。蔵印「御府」。五分

冊の表紙は鬱金色秋草文様、附録巻は茜色波文様で保存状態も良く美麗本。

- (4) ほか国会図書館所蔵本と宮内庁書陵部所蔵(二〇七一―一五七)の別写本を参照したが、本稿の論述に影響するような内容の異同はない。なお、底本の翻字に際しては原文のままを原則とし、濁点・仮名遣い等底本の通りにした。また読解の便宜を考慮して、旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改め、句読点を付け、適宜、改行した。
- (4) 『光源氏一部連歌寄合之事』は、『源氏小鏡』第三系統(増補本系)第一類にあたり、『古典文庫 良基連歌論集三』(一九五五年)に翻刻・収載されているので、岩坪健編『研究叢書³²⁵ 『源氏小鏡』諸本集成』(和泉書院、二〇〇五年)では省略されている。

- (5) 喜撰法師の和歌については、『古今和歌集』入集の「わがいはほは宮このたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」(九八三番)の他に、玉葉集「このまよりみゆるは谷の螢かもしさりにあまの海へゆくかも」(四〇〇番)も喜撰法師の作とされている。

「この歌とても、すでに東常縁の『東野州聞書』で疑問視しており、喜撰法師作を疑う人が多い。」(山下正治「喜撰法師考」『立正大学国語国文』第24号、一九八八年、七五頁)

「わがいはほ」の歌一首が『古今和歌集』に入集していることが、「一首だけ遺されている」という通俗的理解につながったものと推測される。

- (6) 十炷香・花月香・宇治山香・小鳥香・小草香・郭公香・系図香・十種香焼合・源氏香・鳥合香が、一般的な十組の組合せであるが、後半の五つの組香は、名所香・競馬香・矢数香・源平香・連理香などに入れ替わって記されている伝書もある。いずれの組香も香りを多く聞き当てることを競うもの(矢数香・源平香)や、早く多く聞き当てることを目的とする(競馬香)、言葉の組合せで答えるもの(小鳥香・小草香)などで内容的には簡単なものが多い。

- (7) 花散里香では、試み有りの香が客香・ウとなっていて、これは異例のことであり、通常は、試み無しの香が客香・ウとされる。この点がこの組香の誤解されやすい所でもある。

- (8) また「紅葉賀香」には「盤物にてなす時は舞楽香を用ゆ」とあり、『香道蘭之園』四巻に「舞楽香」がある。この組香は「花宴」と「紅葉賀」

両巻の内容を合せて考えられた組香で、春秋優劣論を踏まえた香組である。本稿では、八・九巻所載の「源氏千種香」を研究対象としたので、今回は触れない。

- (9) 第五系統(梗概中心本系、京都大学本(伝飛鳥井重雅筆)「関屋」には「寄合」の言葉が残されている部分があり(岩坪健編『源氏小鏡』諸本集成、六七〇頁)、また「寄合」の言葉は記されないまでも、「賢木」には「あかぬ別の心を、伊勢の事によそへて付べし」(同書、六六六頁)といった、付合の心得を説く箇所も見出される。この点については、伊井氏が『源氏物語注釈史の研究 室町前期』八七三頁で指摘している。

- (10) 『源氏物語』明石巻には「むかへ」「御むかへ」が各一例、「追風」の言葉はなく、「三年」が一例ある。初音巻には「五葉の枝」とあり、篝火巻に「夕闇」はない。「夕闇」の語が登場するのは空蟬巻、螢巻に各一例。また篝火巻では「秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて」とあるが「秋の初風」はない。野分巻でも「端の方に突いたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りましたまふ。」とあるが、「風のとむらひ」の語はない。真木柱巻には「火取り」二例、「御火取」が一例。竹川巻には「桜の賭け物」が一例。「宇治の中宿」は、椎本巻には「宇治のわたりの御中宿のゆかしさに」で登場。早蕨巻に「都へ出ル」はない。浮舟巻では「障泥といふものを敷きて下ろしたてまつる。」「里びたる声したる犬どもの出て来てのしるもいと恐ろしく」とある。

- (11) 柏木巻の源氏の詠歌「誰が世にか種はまきしと人間はばいかが岩根の松はこたへむ」から寄合が生まれたものと察せられる。

資料1 『源氏小鏡』 諸本 「須磨巻」 源氏寄合

(傍線部は『香道蘭之園』「須磨香」の聞きの名目と同一の寄合、波線部は小異はあるが、ほぼ一致する寄合で、筆者による。)

<p>1 第一系統 京都大学本 (伝持明院基春筆)</p>	<p>2 第一系統 宮内庁書陵部本</p>
<p>かたみのか、み・おもやせたる・はしらかくれのおもかけ・さらぬか、み・あか つきかけて・いつる月・すまのわかれ・ はかまいり・ わかきのさくら・にはのやりみつ・にはのくさ・松のはしら・いしのはし・竹かき・ しは・もしほやく・けふりにまかふ・すまに、なかあめ・ ともちどり・ねさめのとこ・よものあらし・うらなみ・たちくるなみ・なみたに うくまくら・月のかほ・みやこをこふるふせい・うきなたちし・ まさかさねたる文・いせしま・みちのくかみ・しほひかた・いふかひなきわか身・ うきめかる・いせおのあま・おもひやれ・ おなしなみた・雲ゐにひとり・くるこま・こまふゑ・はなのさかつき・ ひちかさ雨・人かた・みの日のはらい・大うみのはらまで・ぬれそほち・くたる つかい・ゆめ</p>	<p>(垂) (双六) (彈碁) (盤) (琴) こ・すく六・たんきのはん・こと・ 地<small>りんじよ(輪書カ)也</small>のけん・かたみのか、み・おもやせたる・はしらかけのおも影・さらぬか、み・ あかつきかけて出る月・はかまいり・ あし<small>(声)</small>ふくらう・した<small>(下屋)</small>や・やま<small>(山中)</small>なか・かみしま・あらし風・わかきのさくら・庭の やり水・まつのはしら・いしのはし・竹あめるかき・ひたきや・とこよのかり・ もしほやく・煙のまかふ・ ともちどり・ねさめのとこ・いはほの中・よものあらし・浦<small>なみ</small>立<small>た</small>くる・涙にう く枕・ まさかさねたるふみ・いせしま・みちのくかみ・しほひかた・いふかひなき身・ うきめかる・いせおのあま・ひも<small>(ママ)</small>やつれ・ おなしなみた・雲井にひとり・見やりのいね・春<small>はる</small>のさかつき・なみたそ、く・い なぞらまち・ひちかさ・人かた・大うみのはら・みの日のはらい・ゆめ</p>

<p>3 第一系統 国会図書館本（古活字本）</p>	<p>かたみのかゝみ・おもやせたる・はしらかくれ・さらぬかゝみ・あかつきかけて 出月・ 若木のさくら・やりみつ・にはのくさ・松のはしら・いしのはし・たけかき・ ともちとり・ねさめのとこ・うらなみ・おちくるなみ・なみたにうくまくら・月 のかけ・ 伊勢の使・みちのくかみ・まきつゝくる文・い勢しま・しほひのかた・ゆいかひ なきわか身・うきめかる・い勢をのあま・思ひやれ・ 花のさかき・なみたそゝく・めつらしき・おなしきなみた・くもぬにひとり・ くろこま・かたみのふえ・ ひちかき雨・はらひ・みの日・ ゆめ</p>
<p>4 第二系統 神戸親和女子大学本</p>	<p>かたみのかゝみ・おもやせたる・はしらかくれの面影・さらぬかゝみ・あかつき かけて出る月・すまのわかれ・ はかまいり・ 庭の遣水・わか木のさくら・いしのはし・たけのかき・松のはしら・ しほ・もしほやく、けふりにまかふ・すまになか雨・ ともちとり・月のかほ・ねさめのとこ・よものあらし・うらなみ・たちくるなみ・ なみたにうく枕・うきな、たちし・ まさかねたる文・いせしま・おもひやれ・しほひのかた・ゆふかひなきわか身・ うきめかる・いせおのあま・ おなしなみた・雲ぬにひとり・くろこまふゑ・なみた、そゝく・はなのさかつき・ ひちかき雨・人かた・みの日のはらへ・大海原・ ぬれそほちて、くたるつかひ・ゆめ</p>

5 第三系統 光源氏一部連歌寄合之事

かたみのかゝみ・おもやせたる・かつらかくれのおもかけ・
あかつきかけていつる月・

わかきのさくら・にわのやりみづ・にわのくさ

ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・たちくるなみ・うきまくら・

つぎのかほ・

まさかさねたる文・いせしま・五六まいそかしみちのくのかみ・しほひのかた・
いひかないなき身・うきめかる・いせをのあま・おもひやれ・

おなしなみた・くもゐ・にひとり・くるごま・こまぶゑ・なみだぞ・く・はるの
さかづき・

ひちかさあめ・

すまの**ことば**・さとばなれ・うみづら・あまのいゑい・あしろ・はつかよひ・と
の**いすがた**・こと・もろこし・山がつめきて・宮こはなる・たびすがた・ちさと・
あわれに**すぎき**・いせのつかい・からのか・み・あしふけるや・しらぬ国・なか
さめ・松しまのあま・かとのきぬ・よにしほじみて・かへしふみ・いせ人・こ・
ろづくし・うみすこし・まくらをそはたつ・てならひ・よものあらしまくらもう
くはかり・なみこ・もと・す・ちゑた・うた・うたふ・つくりへ・くさのはな・
ちいさきとり・たまくら・かりのつら・とこよのくに・月のかほ・月の宮こ・い
まこ・にあり・つなでひく舟・山ざと・うしろの山・よのあぢはひ・しばといふ
もの・ゑびすの国・すみよしのかみ・二月廿日・ごすく六・あまりのいわや・い
しのはし・まつのはしら・たけあめるかき・あま人のさへづる・むまにいねかふ・
おふみや人・たかしほ・あすかひうたふ・さけのかわらけ・ゑいのかなしみ・たづ・
ふゑ・みのひのはらひ・人かた・うみのふすま

6 第三系統 都立中央図書館本

かたみのかゝみ・おもやせたる・はしらかくれのおもかけ・さらぬかゝみ・あか
つぎのいづる月・すまのわかれ・

もしほやくけふりにまかふ・

まさかさねたる文・伊勢しま・みちのくかみ・いふかひなきわか身・うきめかる・
伊勢おとこのあま・思ひやれ・

ともちとり・ねさめのとこ・よものあらし・なみたうくまくら・月のかほ・みや
こにて、こゆる心・おなしなみた・くもゐにひとり・くるごま・こまふへ・なみ
たぞ・く・花のさかづき・

ぬれしほちて、^(そほちて)くたるつかひ・ゆめのつけ

<p>7 第三系統 国文学研究資料館本</p>	<p>かたみの、み・おもやせ・はしらかくれのおもかけ・あかつきかけて、いつる月・はかまいり・ 松のはしら・竹<small>（鹿）</small>あめるかき・石のはし・庭の草・たていし・ わか木のさくら・庭のやり水・しはといふもの・ 友千鳥・ねさめの床・四方の嵐・立くる波・枕うく涙・琴・月のかほ・ まきかさねたる文・いせしま・しろきからの紙・みちのくかみ・しほひのかた・ いふかひなき・うきめかる・いせおのあまを、おもひやれ・ ひちかさ雨・かさも、とりあへす・人<small>（人形）</small>かた・大うみのはら・ 里はなれ・さくら・あまの家ゐ・あしろ車・廿日のよひ・とのゐ姿・山かつめきて・ 都はなる、いせしま・からの鏡・うへ木・あしふける屋・しらぬ国・松浦・長雨・ からのきぬ・かくしふみ・枕をそはたつ・手ならひ・うた、うたふ・ちいさき鳥・ 雁の一つら・月の都・とこよの国・月のかほ・いま、ここにあり・山里・すみよ しの神・二月の廿日・暮・すく六・海のいはや・あまのさへつり・大宮人・飛鳥井、 うたふ・さけのかはらけ・ゑひのかなしみ・笛・あまのふすま・さいしやうへ、 をくり物・笛、黒駒をまいらせしなり</p>
<p>8 第三系統 天理図書館本</p>	<p>形見のか、み・おもやせたる・さらぬ別・ はかまいり・ 友なし千<small>（千）</small>とり・ね覚め床・月のかほ・うきまくら・宮こ、こひしき・ まき重たる文・伊勢しま・うきめかる・いせをのあま・ひなのやつれ・ おなしなみた・雲にひとり・春のさかつき・有かたき御こ、ろさし・ ひちかさ雨・ さとはなれ・あまのいへ・あしろくるま・とのゐすかた・琴・からくに・山かつ めきて・宮こはなる、千里・伊勢のつかひ・あしふける屋・しらぬくに・長雨・ 松しま・海すこし・てならひ・いせ人か、くれしふみ・す、か<small>（鈴鹿）</small>・うたふ・ちいさ きとり・うしろの山・やまさと・このくに・住吉神・わか木の桜・二月廿日・暮、 双六・あまのいわや・たかしほ・大宮人・石はし<small>（鹿）</small>・あまのさへつり・さけのかは らけ・たつ<small>（鹿）</small>・馬にいねかふ・ゑい<small>（鹿）</small>のかなしみ</p>

<p>9 第四系統 神宮文庫本</p>	<p>形見の鏡・おもやせたる・柱隠れの俤・暁かけて出ぬる月・さ<small>(さらぬか)</small>えぬ鏡・ はかまいり・ わか木の桜・庭<small>(には)</small>の遣水<small>(やり)</small>・庭の草・松の柱・石の橋・竹<small>(たけ)</small>のすかき・ しは<small>(巻)</small>・塩やく煙にまかふ・すまの長雨・ 友千鳥・ね覚の床・四もの嵐・立ちくる波・泪に浮枕・月の顔・都をこふる・う き名立し・ 伊せのつかひ文・卷かさねたる文・伊せしま・みちのくかみ・塩干かた・いふか ひなき・我身、憂めかる・伊せおの海士・おもひやれ・ おなし泪・雲るにひとり・黒駒・こま笛・泪そくく・花<small>(はな)</small>盃<small>(さかずき)</small>・ ひちかさ・人かた・巳の日のはらへ・大海はら・ 夢の告</p>
<p>10 第四系統 大阪市立大学本</p>	<p>かたみの鏡・おもやせたる・柱かくれのおもかけ・さらぬか、み・暁かけて出る月・ すまのわかれ・ 若木のさくら・庭のやり水・庭の草・松のはしら・石のはし・竹のかき・ 柴・うしろの山に立煙・ とも千鳥・ね覚の床・四方の嵐・うら波・立くる波・まくら<small>(本のママ)</small>にうく枕・月のかほ・ まさかさねたる文・いせしま・みちのくかみ・しほ<small>(瀬干)</small>ひかた・いふかひなきわか身・ うきめかる・伊勢おのあま・思ひやれ・ 雲るにひとり・くろこま<small>(黒駒)</small>・こま笛<small>(高麗)</small>・泪そくく・おなし泪・花の盃・ひち笠雨・ 人かた・大うなはら・みの日のはらひ</p>

資料2 「源氏千種香」の記述と『源氏小鏡』諸本との関係

○一致 △近似する ×不一致 / 該当する記述がない ※誤写か

第六系統	第五系統	第五系統	第五系統	第四系統	第四系統	第三系統	第三系統	第三系統	第三系統	第三系統	第二系統	第一系統	第一系統	第一系統	『源氏小鏡』諸本
14 京都大学本	13 天理図書館本 (連蔵筆)	12 京都大学本 (飛鳥井重雅筆)	11 天理図書館本 (伝飛鳥井宋世筆)	10 大阪府立大学本	9 神宮文庫本	8 天理図書館本	7 国文学研究資料館本	6 都立中央図書館本	5 光源氏一部連歌寄合之事	4 神戸親和女子大学本	3 国会図書館本	2 宮内庁書陵部本	1 京都大学本	柴の煙	
/	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	只ならぬ身
○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	いつき・神のいかき
×	△	○	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	夏の遅月
○	/	○	/	※	○	※	○	○	○	×	×	○	○	○	大姫君
/	×	/	/	/	×	/	×	×	○	○	×	△	/	△	浮船香証歌
△ (朱)	/	/	△	○	△	○	×	○	○	○	×	△	/	△	あらはれ文
/	/	/	○	/	○	△	○	○	○	○	○	○	/	○	九条わたり
○	/	/	×	/	○	○	○	○	○	○	○	○	/	○	こたま
○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	小野の尼
○	○	/	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

A Quest for the Source of “Genji chigusa kō” with Attention to *kiki no myōmoku* and *Genji yoriai*

TAKEI Masako

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese Literature

Kōdō ran no sono (Book of kōdō) is a text edited by Kikuoka Senryō in the early eighteenth century on *kōdō*, the Japanese art of incense. It describes the manners of *kōdō* and contains more than two hundred kinds of *kumikō*, games of judging the difference between fragrances. “Genji chigusa kō,” the subject of this paper, is included in the eighth and ninth chapters. It notes fifty-three kinds of *kumikō*, all related specifically to *The Tale of Genji*. But there are some differences between these *kumikō* contests and the story found in the *Genji*.

The Tale of Genji was read in Japan throughout the medieval and early modern periods, and many digest versions of the tale were produced. *Genji kokagami* in particular was read by many people. This version was not only a digest of the *Genji* but also served as a sourcebook for composing *renga*, because it included *Genji yoriai*, poetic words based on the Heian tale. These same words are also found in the “Genji chigusa kō” chapters of the incense text, where they are used as *kiki no myōmoku*, or keywords, for judging the difference between fragrances. Since many of the keywords seem to be derived from *Genji kokagami*, I propose that “Genji chigusa kō” may in fact be based on *Genji kokagami*. There are six extant variations of *Genji kokagami*, and “Genji chigusa kō” may be connected with the oldest of these. The aim of this essay is to elucidate the relationship of these incense games to literature, and to show clearly how “Genji chigusa kō” was influenced by *Genji kokagami*.

Key words: “Genji chigusa kō,” *Genji kokagami*, *kiki no myōmoku*, *Genji yoriai*, *kumikō*